

ユングの超常体験

——自伝に基づいて

宮 下 聡 子

スイスの精神科医カール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) は自身の数々の超常体験¹を、湯浅泰雄氏が伝えるところでは「死に至るまで […] ひた隠しにし」²、「それらの内容は、彼の死後公表された自伝によって初めて明らかにされた」³。ユングの自伝『C・G・ユングの思い出、夢、思想』(1961年)⁴が公刊されてからはユングの超常体験はあまねく知られ得るところとなったわけであるが、それらは湯浅氏も指摘するように「断片的なエピソードの形で」⁵記されており、必ずしも明瞭ではない。

管見の限り、自伝に記されているユングの超常体験を主題的にとり上げた研究はない。それらの体験を紹介している文献なら数は少ないながらもある⁶が、各著者の関心に応じて体験を切り取っている観がある。また、そもそもそれらの文献が依拠している自伝のテキスト自体に難があると言わざるを得ない。それらの文献が依拠しているのはドイツ語原典ではなく、英語の文献では英訳、日本語の文献では英訳からの重訳と見られる日本語訳⁷である。村本詔司氏がつとに指摘している⁸ように、自伝はこのほか翻訳に問題が多く、正確な理解のためには原典に依拠することが必須となる。

超常体験者というのもユングの特性の一つである以上、ユングの超常体験は明るみに出されなければならない。しかも正確に。そのような考えから本稿では自伝の原典を精査し、まず1でそこに記されているユングの超常体験を概観するが、ユングの超常体験は生涯にわたるものであるためかなりの紙幅を割くことになる。そして2で1を踏まえてユングの超常体験の特徴と意味について全般的に考察する。

1 概観

ユングの超常体験は幼い頃から晩年に及んでいる。以下で自伝の原典からユングの超常体験の事例を拾い上げ、事例ごとにその概要を示し、それらをおおよその時系列⁹に並べる。

1. 1 母の部屋から現れた人影 (S. 24-25)

ユングが7、8歳頃¹⁰のことである。当時ユングの両親は別々の部屋で寝ており、ユングは父の部屋で寝ていた。

夜、母は不気味で謎めいていた。ある夜私は彼女のドアからほのかに光るぼんやりした人影が出てくるのを見た。その頭は首から前方へ外れて、小さな月のように前方の空中に浮かんだ。すぐに一つの新しい頭が生じ、再び外れた。この過程は6、7回繰り返された。

この異形の人影の正体は明らかにされていないが、「夜、母は不気味で謎めいていた」という記述から母と解されていることがうかがえる。

1. 2 結婚相手の直観 (S. 406-407)

1896年 (21歳になる年)、ユングがシャフハウゼンに大学の友人を訪ねた際、母の言いつけで当地に住む母の幼なじみのラウシェンバッハ夫人の家に寄った時のことである。

私が入った時、階段に14歳くらいのお下げ髪の女の子が立っているのが見えた。その時私はわかったのだ。この人は私の妻だ！ と。私はそのことに深く心を揺さぶられた。というのも私はほんの一瞬彼女を見ただけだったのに、すぐに絶対の確信をもって彼女が私の妻になることがわかったからだ。

ユングから求婚したのではあるが、1903年、27歳でユングはこの女の子——もう女性というのがふさわしい年齢になっていたが——と結婚することになるのである。

1. 3 ダイニングテーブルとパンナイフの爆裂 (S. 111-113)

1898年 (23歳になる年) の夏休みにユングは二つの超常的な出来事を体験しているが、これらは同じ意味を持つものとユングに解されている。

一つ目の出来事はユングが書齋で教科書を読んでいた時隣室で起こった。隣室は食堂で、そこには70年前につくられた円い胡桃材のダイニングテーブルが置いてあり、母がそのテーブルから1メートルほど離れた窓際に編物をしていた。その時食堂のドアは半開きになっていた。妹はまだ学校から帰っておらず、女中は台所にいた。

突然ピストルの発砲音のような爆発音がした。私はとび上がって、爆発が聞こえた隣室へ駆け込んだ。私の母は肘掛け椅子に呆然と座っており、編物は彼女の手から落ちていた。彼女はどもりながら「な、なにが起こったの？ 私のすぐそばでだったのよ」と言ってテーブルを見やった。私たちは何が起こったのかを見た。テーブルの甲板が中心を越えた所まで裂けていたのである。しかもつなぎ合わされた所ではなく、人手の加わっていない木を貫いて。

70年の間に乾ききった天然木が比較的湿度の高い夏に裂けたということもユングには解せなかった。

もう一つの出来事はそれから14日ほど経って起こった。ユングが夕方6時に帰宅すると、母と妹と女中が大騒ぎをしていた。1時間ほど前にまたもや耳をつんざくような爆発音が今度は19世紀初めの品であるサイドボードの方向からして、彼女たちはそこを隈なく調べたが裂けた跡は見出せなかったというのである。

私はすぐにサイドボードとその周りを精査してみたが、やはり徒労に終わった。次いで私はサイドボードの内部とその中身を調べ上げた。パン籠が入っている引き出しの中に私はパンの塊とその傍らのパンナイフを見つけたが、パンナイフの刃は大部分折れてしまっていた。柄は四角形の籠の一つの隅にあり、他の三つの隅のいずれにも刃の破片があった。ナイフは4時のコーヒーの時間に使われ、その後しまわれていた。それ以降はもう誰もサイドボードのところには行っていなかったのである。ユングは翌日この四つに砕けたパンナイフを腕利きの刃物師のところへ持って行って拡大鏡で見てもらったが、鋼に欠陥はなく、人為的な力が加えられたとしか考えられないとのことであった。

ユングは「なぜ、どうしてテーブルが裂け、ナイフが砕けたのか。偶然という仮説は私にとっては端的に無茶である」と考えた。ユングはその答えを数週間後に得ることになる。

数週間後、かなり前からテーブルターニングをやり、15歳を少し超えた若い女の子の霊媒がいる親戚の集まりがあることを私は聞き知った。そこに集う人たちは、夢遊病的状態と心霊術の現象を生み出すこの霊媒に私を会わせようという考えを少し前からいっていた。それを聞いた時、私はすぐに

家でのおかしな現象のことを考え、それらはこの霊媒と関連があるのではないかと推測した。そこで私は彼女と他の有志とともに毎週土曜日の夕方に例会を開き始めたのである。ユングが自宅での二つの出来事を霊媒と関連づけていることがわかる。どのような関連がユングによって考えられていたのかは詳らかでないが、推測するなら、二つの出来事が霊媒との出会いの予示を意味すると考えられていた可能性、二つの出来事が霊媒によって引き起こされたと考えられていた可能性があるであろう。

1. 4 患者が拳銃自殺した夜の頭痛 (S. 142-143)

ユングは患者との間でしばしば「超心理学的性質を持つ現象」を体験したが、中でも印象的な事例としてユングが挙げるのは、ユングが心因性の鬱を治した患者の事例である。その患者は結婚したが、ユングは患者の妻により印象を持ってなかった。彼女は非常に嫉妬深く、夫への束縛も激しかった。夫に感謝されていたユングも彼女の嫉妬の対象になった。妻の態度が過度な重荷となって患者は結婚後1年でまた鬱になった。その可能性を見越してユングは患者に気分の沈滞に気づいたらすぐユングに連絡するよう約束させていたのであったが、患者の不調を妻が軽く見たこともあって、その約束は果たされなかった。そのような状況で以下のことが起こったのである。

その時私はBで講演をしなければならなかった。真夜中頃私はホテルに着き——私は講演の後数人の友人と居残っていたのであった——、すぐに床に就いた。しかし私は長いこと眠れないまま横になっていた。2時頃——ちょうど寝ついたところだったにちがいない——私は驚いて目を覚まし、誰かが私の部屋に入ってきたと確信した。ドアが急いで開けられたかのようにも思えた。私はすぐにあかりをつけたが、そこには何もなかった。誰かがドアを間違えたのかもしれないと思い廊下をのぞいてみたが、そこには死んだような静けさがあった。「おかしい。たしかに誰かが部屋に入ってきたのだ！」と私は思った。それから私は思い出そうと努め、何かが私の額に当たって〔頭を貫通して〕頭蓋の後壁にぶつかったかのような鈍い痛みで目が覚めたことに思い及んだ。翌日私はその患者が自殺したという電報を受け取った。彼は拳銃自殺したのであった。弾丸が頭蓋の後壁にめり込んでいたことを後に私は聞き知った。

この体験についてユングは次のようにコメントしている。

この体験は元型的状況——ここでは死——と関連して観察されるのが稀ではないような真正の共時的現象であった¹¹。無意識における時間と空間の相対化によって、私は現実にはまったく別の所で起こっていることを知覚することができたのである。集合的無意識は万人に共通である。[...] この場合、私の無意識は私の患者の状態を知っていた。私は自分がその夜じゅういつもの気分とは異なり妙に不穏で神経質になっているのを既に感じていたのである。

1. 5 初対面の紳士の人生物語 (S. 56-57)

ユングは「私が絶対に知ることのできないことを私が突然知ることが私の人生ではしばしば起こっている」として、「知りもしないある男の人生物語を語った」エピソードを例示している。

私の妻の友人の結婚式でのことであった。新婦とその家族は私のまったく知らない人たちであった。食事の時、私の向かいには美しい総ひげをたくわえた中年の紳士が座っていた。彼は弁護士であると私に紹介されていた。私たちは犯罪心理学の話で盛り上がった。彼のある問いに答えるために、私は子細に潤色したある事例の物語をでっち上げた。私が話しているうちに相手の表情が豹変しテーブル

に異様な沈黙が生じていることに私は気づいた。きまりが悪くなって私は話すのをやめた。ありがたいことに既にデザートに入っていたので、私はほどなく立ち上がりホテルのロビーに行った。私は片隅に引っ込んで、葉巻に火をつけ、事態をじっくり考えようとした。その瞬間、私のテーブルにいた紳士の一人がやって来て私をなじった。「いったいどうしてあなたはあんな無礼なことをなされたのですか?」「無礼なことですか?」「ええ、あなたがされたあの物語ですよ!」「でもあれは私の作り話だったんです!」

たいへん驚いたことに、私が私の向かいの紳士の物語をこと細かに語っていたことが判明したのである。さらに私はその瞬間、私がその全物語の一語ももはや覚えていないことを発見した——今日に至るまで私はそれを思い出せずにいる。

ユングはこの種の出来事において「その知はそれが私自身の思いつきでもあるかのようにやって来る」と言い、こうした出来事は自らの「人間や物事をありのままに見る才能」のなせるわざであると解している。

1. 6 フロイトの本箱の中での爆音 (S. 159-160)

1909年、33歳の時にユングがウィーンにジークムント・フロイトを訪ねた際、ユングはフロイトに「予知と超心理学一般」についてどう考えるか尋ねてみた。するとフロイトは「唯物論的先入見からそれらの質問をすべてナンセンスだとしりぞけ、その際たいへん皮相的な実証主義を引き合いに出した」ので、ユングは「あまりに鋭く反論しないようにするのに苦労した」。この状況で以下の出来事が起こるのである。

フロイトが論証を行っている間、私は奇妙な感覚を覚えた。まるで私の横隔膜が鉄でできていて灼熱している——灼熱した横隔膜穹窿をなしている——かのように私には思えたのである。そしてその瞬間、私たちの真横にあった本箱の中で爆音がして、二人とも仰天したのであった。私たちは本箱が私たちの上に崩れ落ちてくるのではないかと思った。まさにそのような音がしたのである。私はフロイトに言った。「今のがいわゆる触媒による外在化現象です」。

彼は言った。「おお、そんなものはまったくのナンセンスだ!」

私は言い返した。「それは違います。あなたは間違っておられます、教授閣下。私が正しいことを証明するために、すぐにもう一度あのような爆音がすると予め申し上げておきます!」——果たして、私がその言葉を言い終わらないうちに、同じ爆音の本箱の中で始まったのである!

この体験についてユングは次のようにコメントしている。

今日なお私がこの確信をどこから得たのか私にはわからない。しかし私にはその爆音が繰り返されるということがはっきりとわかっていたのである。

1. 7 第一次世界大戦前に見たヨーロッパを襲う洪水の幻と凍結の夢 (S. 178-180)

1913年の秋になる頃、38歳の時、ユングは外界から「圧」を感じるようになった。同年10月、ユングはひとりで旅をしている途上で突然幻に襲われ、その幻は1時間ほど続いた。

私は北海とアルプスの間の北の低地がすべてすさまじい洪水にのみれるのを見た。洪水はイギリスからロシアにまで、また北海の海岸からほとんどアルプスにまで及んだ。それがスイスに達した時、私たちの国を守るためというように、山々がどんどん高くなっていった。恐ろしい破局が起こっているのだ。私は猛烈な黄色い大波や水に浮かんでいる文化作品の残骸や無数の人の死を見た。それから海は血に変わった。

2週間後、この幻は同じ状況下で再び現れたが、血が変わるところがおぞましさを増していた。「内なる声」はユングにこう告げた。「それをよく見ておきなさい。それはまったく現実であって、そうなるであろう。それは疑い得ない」。

1914年にユングは3回同じ夢を見た。1回目は4月、2回目は5月、3回目は6月に見ている。夢の内容は以下のとおりである。

真夏に北極の寒さが襲来し、地が凍結してしまう。私はたとえばロレーヌ地方全域とその運河が凍ってしまうのを見た。全地に人がいなくなり、すべての湖と川は凍結してしまう。すべての生きた緑は凍りついてしまう。

ユングは言う。「私は何かが起こることを覚悟していた。このような幻や夢は運命であるから」。同年7月の終わり、ユングは英国医師会の招きでアバディーンへ赴き、会議の席で「精神病理学における無意識の重要性」について講演することになったが、これも彼には「まさにその時無意識の重要性について話さなければならないということは運命のようにさえ思えた」。果たして「8月1日、世界大戦が勃発した。今や私の課題が確定した。すなわち、私は何が起こったのか、またどの程度私自身の体験が集会的なものに関連しているのか、理解するよう努めなければならないということである」。当の幻と夢は第一次世界大戦の勃発を予めとらえていた無意識からのメッセージであるとユングが解していることがうかがえる。

1. 8 自宅に押しかけた霊の群れ (S. 193-195)

ユングが『死者たちへの七つの説教』(1916年)¹²を物する前の出来事である。1916年(41歳になる年)のある日、ユングは「不穏な気持ち」を覚え、「空間が幽霊のような存在で一杯になっているかのような感じ」をいだいた。それからユングの家に幽霊現象が起こり始めた。夜、長女は白い人影が部屋を通って行くのを目撃し、二女は二度掛布団を引きはがされたと言語、9歳の息子は不安夢を見た。翌々日、ユングは以下の体験をした。

日曜日の午後5時頃、玄関ドアの呼び鈴がけたたましく鳴った。晴れわたった夏の日であった。二人の女中は台所にいた。そこからは玄関ドアの前の開けた空間を見通すことができた。私は呼び鈴の近くにおいて、その音を聞き、クラッパーが動いているのを見た。皆すぐにドアのところまで走って行き、誰がいるのか見てみたが、誰もいなかった！ 私たちはただ顔を見合わせるばかりであった。空気が濃かった、と申し上げておこう！ その時私は、今何かが起こるにちがいないとわかった。家じゅうが群衆で埋め尽くされているかのように、霊たちで満杯になっていた。彼らはドアの下にまっていた。ほとんど息もできない感じであった。自然と私の中で「なんてこった、いったいこれは何なのだ？」という問いが燃え上がった。すると彼らは声をそろえて「私たちはエルサレムから帰ってきた。私たちが求めていたものはそこには見当たらなかった」とわめき立てた。これらの言葉は『死者たちへの七つの説教』の最初の行に相当する。

それから、同書が私の中から流れ出始め、三晩のうちにその作品は書かれた。私が筆を下ろしたとたん、霊の集まりはことごとく崩れ落ちた。幽霊現象は終わった。[...] 翌晩まで何かが再び集まり、またしてもそのような展開になった。

ユングはこの体験について次のように述べている。

この体験はそのとおりに、あるいはそう思えるとおりに受けとらなければならない。恐らくそれは超心理学的現象が起こり得るような当時の私の情動の状態と関連があった。それは無意識的の布置であった。

1. 9 中世の傭兵の行進のイメージ (S. 233-235)

1924年の早春（48歳）の静かな夜、ユングはボリンゲンの別宅（塔）にひとりでいた時、次のような体験をした。

夜、私は塔の周りを巡るかすかな足音で目が覚めた。遠くで音楽も鳴り響き、それが次第に近づいてきた。そして笑い声や話し声が聞こえてきた。私は考えた。いったい誰が辺りを巡っているのか。いったいこれは何なのか。湖に沿って小道があるだけで、そこもいつもはほとんど人通りがないのに！このようにあれこれ考えているうちに私はすっかり目が覚めてしまい、窓のところへ行った。私は錠戸を開けたが——辺りは静まり返っていた。人も見えなかったし、何も聞こえなかった。——風も——何も——まったく何もなかった。

それにしても奇妙だと私は思った。私は足を踏み鳴らす音も笑いもおしゃべりも現実であると確信していた！しかし私は夢を見ただけだったらしい。私はまたベッドに戻り、人はどうして思い違いをすることができるのか、私があのような夢を見たのは何によるのか考えてみた。このように考えながら私はまた眠りに落ちた——そしてすぐに同じ夢が始まり、私はまた足音、おしゃべり、笑い、音楽を聞いた。その際私は何百人もの暗色の服を着た人影の視覚的表象を持った。恐らく彼らは一張羅を着た農民の若者たちで、山からやって来て、足を踏み鳴らし、笑い、歌い、アコーディオンを演奏しながら両側から塔を巡って行ったのであろう。私は立腹して考えた。まっぴらだ！夢かと思ったが、やはり現実だ！この情動で私は目を覚ました。私はまたとび起きて窓と錠戸を開けたが、辺りは先ほどと同じで、死んだように静かな月夜であった。これはまさしく幽霊現象だ！と私は思った。

ユングは当初この体験の意味がよくわからなかったが、ずっと後になって類似の体験談の存在を知ったことをきっかけに改めて自らの体験の意味を考えてみた。ユングは自らの体験の「現実性」を顧慮し、その体験を孤独や静けさの「心的補償」と説明することにも「幻覚」と呼ぶことにも満足せず、以下の解釈に行き着いた。

それは共時的現象であった可能性がきわめて高い。この現象は、私たちが内的感覚によって知覚したり予感したりするゆえに知っていると思っている出来事は外的現実にも対応する物事をしばしば持っているということを示す。ところで私の体験には具体的に対応することが実際に存在する。というのも中世にはそのような若者の行進が行われていたからである。それは傭兵の行進で、——たいてい春に——中央スイスからロカルノへ行進し、当地のミヌジオの「カサ・ディ・フェロ」で集い、さらにミラノへ行進した。イタリアで彼らは兵士となり、異郷の給料で戦った。だからあのイメージは、春ごとに行われ、歌とお祭り騒ぎで故郷に別れを告げたそれらの行進の一つであったかもしれないのである。

このように、ユングは自らの体験を「共時的現象」と意味づけ、中世に実際に行われていた傭兵の行進の一つを彼が時間を超えて感知した可能性を示唆するのである。

1. 10 ヴィルヘルムの死の数週間前に見た中国人の幻 (S. 384)

ユングは10年来親交のあったドイツの中国学者リヒアルト・ヴィルヘルムが亡くなる¹³数週間前に以下の幻を見た。ユングが54歳の時の出来事である。

彼の死の数週間前、もう長いこと彼からは何の連絡もなかったのであるが、私は寝入りばなに幻によって目を覚まさせられた。私のベッドの脇に、暗青色の長衣を着て袖の中で手を組んでいる一人の

中国人が立っていた。彼は私に何らかのメッセージを伝えようとするかのように私に深くお辞儀をした。それが何なのか私にはわかった。その幻の奇妙さはその尋常でない鮮明さにあった。私には彼の顔の小じわの1本1本ばかりか彼の長衣の布地の糸の1本1本まで見えたのである。

1. 11 ラヴェンナの正統派洗礼堂のモザイク (S. 288-290)

ユングはラヴェンナを1914年に初めて訪れ、その約20年後(60歳頃)に知人女性とともに再び訪ねたが、二度とも当地のガッラ・プラチディア廟に心を動かされた。再訪時、ユングと知人女性はガッラ・プラチディア廟の後に、これまた二度目の来訪となる正統派洗礼堂に行ったのであるが、この正統派洗礼堂でユング自身「私の身に起こった最も奇妙なことの一つ」と認める出来事が起こるのである。ユングの記述を追ってみよう。

驚いたことに、私の記憶では窓があった所に、途方もなく美しい4枚の大きなモザイクのフレスコ画を私は見た。それらを私は忘れてしまっていたようだ。[...] 南側の図像はヨルダンでの洗礼を、北の第二の図像はイスラエルの子らの紅海通過を描いており、東の第三の図像はほどなく記憶が褪せてしまった。もしかしたらそれはナアマンのハンセン病のヨルダン川での洗浄を示していたかもしれない。[...] 最も印象的だったのは洗礼堂の西の第四のモザイクで、私たちはそれが最後の図像であると見た。それはキリストが水に沈みそうになっているペテロに手を差し伸べているさまを描いていた。このモザイクの前に私たちは少なくとも20分とどまり、原初的な洗礼式について、特に現実の死の危険と結びついたイニシエーションとしての洗礼という奇妙なとらえ方について議論した。

[...] 私たちが洗礼堂を出た後、私はそれらのモザイクの写真を買おうと、すぐにアリナーリへ行ったが、何も見つけることはできなかった。

帰国の時間が迫っていたためユングはその買い物を後日に回すことにしたのであるが、ほどなくユングにその好機が訪れた。

私が帰国してまもなく同じくラヴェンナへ旅立とうとしていた知人に私はそれらの写真を手に入れてきてほしいと頼んだ。もちろん彼はそれらを調達することができなかった。というのも彼は私の述べたモザイクはそもそも存在していないことを確認したからである!

とはいえユングは帰国後あるセミナーでそれらのモザイクに現に言及していたし、同行した知人女性は「自分の目で見た」ものが存在していないということを長い間信じていることができなかった。

ユングはこの出来事について、「ほとんど説明がつかない」としながらも、「皇后ガッラ・プラチディア(450年没)の物語の中の一つの事件がその解明に何らか役立つかもしれない」として次のように述べている。

彼女は真冬に嵐の中をピザンチウムからラヴェンナへ渡った際、彼女が切り抜けられたら教会を建て、そこに海の危険を描くという誓いを立てた。彼女はラヴェンナにバシリカ・サン・ジョヴァンニを建て、そこをモザイクで飾ることで誓いを果たした。中世初頭にサン・ジョヴァンニはモザイクもろとも火災によって破壊されたが、なおミラノのアンプロジアーナには舟に乗ったガッラ・プラチディアを描いたスケッチがある。

ユングは知人女性とともに見たモザイクと今は消失したバシリカ・サン・ジョヴァンニのモザイクとの関連性を示唆するのである。

1. 12 数週間後に事故死する女友達が亡き妹と一緒に園遊会に出席していた夢 (S. 306)

ここでとり上げるのは、1. 13の冒頭で示す趣旨でユングが例示している実体験の三つ目に当たる。ユングの妹が亡くなった1935年¹⁴の数年後（60代前半）のことである。

ある時私は園遊会に出席している夢を見た。私は妹を見つけてとても驚いた。というのも彼女はもう数年前に亡くなっていたからである。私の亡き友人の一人もそこにいた。残りの人たちは存命中の知人であった。妹は私のよく知っているある婦人と一緒にいた。このことから私は夢の中でもう、この婦人は死に接していると推断した。——彼女は予め書き留められていると私は思った。夢の中で私は彼女が誰であるかも、彼女がパーゼルに住んでいることも知っていた。それなのに目が覚めるやいなや、夢全体はありありと目に浮かぶのに、彼女が誰であるか、いくら思い出そうとしても思い出せなかったのである。私はパーゼルの知人全員を思い浮かべ、記憶像の表象によって私の中の何かがよみがえってこないか注意してみた。何もよみがえってはこなかった！

数週間後、私は親しくしていたある婦人の事故死の知らせを受けた。すぐに私は彼女こそ私が夢の中で見たけれども思い出せなかった婦人であることがわかった。私は多くの詳細をそなえた彼女の記憶像を持っていた。というのも彼女はかなり長い間、彼女の死の1年前まで私の患者だったからである。しかし彼女を私の記憶に呼び起こそうとした際、私のパーゼルの知人の長い列の中によりよって彼女の像は浮かんでこなかったのである。それはほぼ確実に、最初に浮かんでくるものの中になければならなかったのであるが。

1. 13 孫が溺れそうになった瞬間に見た溺れかけた人の記憶像 (S. 305-306)

ユングは言う。「無意識は私たちに何かを伝えたりイメージの形で暗示したりすることによって私たちにチャンスを与えてくれる。それは私たちが論理を尽くしても知ることでできない物事を適切なタイミングで私たちに伝える能力を持っている。共時的現象、正夢、虫の知らせについて考えてみたまえ」。ユングは自らの三つの体験を例示しているが、その一つ目が以下の体験である（二つ目は1. 14、三つ目は1. 12）。

ある時私はポリングゲンから家へ向かっていた。第二次世界大戦中のことであった。私は本を携えていたが、列車が動き出した瞬間、溺れかけた人のイメージが私を襲ったため、本を読むことができなかった。それは兵役中の事故の記憶であった。走行中ずっとそれは私から離れることがなかった。私は不気味な感じがして、いったい何が起こったのか、何か事故でもあったのかと考えた。

エルレンバッハで下車して家まで歩いて帰ったが、私は依然としてその記憶と心配に心を奪われていた。庭に〔当時同居していた〕二女の子どもたちが突っ立っていた。〔…〕皆呆けた顔をしていた。私が「いったいどうしたの？」と尋ねると、彼らは当時男の子の中で一番小さかったアードリアーンがポート小屋で水に落ちたのだと話してくれた。そこはかなり深く、彼はまだ泳げなかったので溺れそうになったのである。その時彼の兄が彼を助け出したということであった。これは私が列車の中であの記憶に襲われていたちょうどその時に起こっていた。

ユングはこの出来事について「無意識が私に合図を与えていたということなのだ」とコメントしている。

1. 14 妻の従姉妹の死の瞬間に見た夢 (S. 306)

ここでとり上げるのは、1. 13の冒頭で言及したユングの三つの体験のうちの二つ目である。ユングはその体験を1. 13の体験と類似のものとして紹介している。

私は妻のベッドが石壁の深い穴になっている夢を見た。それは墓で、どこことなく古典古代を思わせた。その時私は誰かが息を引き取るかのような深いため息を聞いた。妻に似た人影が穴の中で起き上がり、浮かび上がってきた。彼女は奇妙な黒いしるしが織り込まれている白い長衣を着ていた。私は目が覚め、妻を起こして時刻を確認した。午前3時であった。その夢はたいへん奇妙だったので、私はそれが死亡を示しているのではないかとすぐに思った。7時に妻の従姉妹が3時に亡くなったという知らせが届いた！

1. 15 宇宙で見た地球の幻と主治医の幻 (S. 293-297)

1944年の初め、68歳の時、ユングは足を骨折し、それに続いて心筋梗塞を起こして意識不明になった。危篤に陥り酸素やカンフルの投与も受けた。ユングが意識不明の中、宇宙の高みで見たという地球の幻と彼の主治医の幻に注目したい。ユングの記述を見てみよう。

私には自分が宇宙の高みにいるかのように思えた。私のはるか下にはすばらしく青い光に包まれた地球が見えた。深青色の海と諸大陸が見えた。私の足のはるか下にはセイロンがあり、私の前にはインド亜大陸があった。私の視野に地球全体はおさまらなかつたが、その球形は明確に認識でき、その輪郭はすばらしい青い光によって銀色にきらめいていた。地球は多くの所で色がついているか酸化銀のような暗緑色の斑点がついているように見えた。「左」のかなたには広大な土地——赤黄色のアラビア砂漠があった。あたかもそこでは銀の地球が赤黄色の色調を帯びているかのようであった。それから紅海が現れ、はるか後ろに、いわば「左上」にかろうじて地中海の端を認めることができた。私の視線はとりわけそちらへ向けられていた。他のものはすべてぼんやりとしか見えなかつた。ヒマラヤの雪山も見えたが、そこはもやが立ち込めたり雲で覆われたりしていた。私は「右」へは目をやらなかつた。私は自分が地球を発とうとしていることを知っていた。

そのような展望を得るには空中のどのくらいの高さにいなければならないのか、後になって私は知った。それは約1500キロメートルである！ その高さからの地球の眺めは私がそれまでに見た最もすばらしく最も魅惑的なものであった。

この後ユングが反対側に向きを変えると、彼の視界には「巨大な暗色の石の塊」が入ってきたが、中は穿たれて礼拝堂と控えの間がつくられていた。ユングが石の塊の入り口に通じる階段に近づくと、これまで彼が思い、願い、考えたことすべてがこの上なく苦痛な過程を経て彼から脱落していったが、これまで彼が生き、行ったことすべてと彼に起こったことすべては彼のもとに残った。ユングは控えの間に入って礼拝堂に近づいた時、礼拝堂に入れば真の仲間たちと出会え、自分が何者であり、自分の生の意味が何であり、自分の存在の理由が何であるのかといったことを究極的に理解できると確信した。その時ユングは主治医の幻を見るのである。

下から、つまりヨーロッパから一つのイメージが上昇してきた。それは私の主治医、というより金の鎖か金の月桂冠で縁どられた彼のイメージであった。私はすぐに、「ああ、この人はたしかに私の治療にあたってくれている私の主治医だ。しかし今、彼は彼の原形で、すなわちコススの王Basileusとしてやって来た。今生では彼はこの王の化身、いにしえより存在している原形の時間的具現であった。今や彼は彼の原形でやって来た」とわかった。

恐らく私も私の原形でいたであろう。尤も私はそれを知覚したわけではないので、そうであったのだろうと想像するだけであるが。彼が一つのイメージとして深みから私の方へ浮かんできて私の前に立つてから、私たちの間では無言の思惟伝達が行われた。私の主治医は私にあるメッセージを伝える

ために地球から派遣されたという。つまり、私が発とうとしていることに異議が唱えられており、私は地球を去ってはならず、帰還しなければならないというのである。私がそれを聞き取った瞬間、幻はやんだ。

ユングは脱落の苦痛な過程が無駄になり、礼拝堂に入って真の仲間たちと出会うこともかなわなくなったことにひどく落胆した。そして自分を今生へ連れ戻したことで主治医に反感をいただいた。とはいえユングには主治医のことが気がかりであった。

「なんと、彼の命が危ない！ 彼は私に彼の原形で現れたのだ！ 人はその形に至ると死ななければならなくなる。その時彼はもう「彼の仲間たち」の集団に属しているのだ！」——突然、彼は私の代わりに死ななければならないという恐ろしい考えが私に浮かんだ！ 私はそのことについて彼と話そうと最大限の努力をしたが、彼はそのような私を理解してくれなかった。[…]

事実、私が彼の最後の患者となった。1944年4月4日——その日付を私は今でも正確に覚えている——、私は初めてベッドの端に座ることを許された。そして同じ日に彼は病床に臥し、二度と立ち上がることはなかった。聞くところによると、彼は時折発熱発作を起こしているということであった。その後まもなく彼は敗血症で亡くなった。

1. 16 亡き友人の出現 (S. 315-316)

ユングは「死後の魂の存続についての妥当な証明を行うことは不可能であるとしても、人を考え込ませるような体験はとにかく存在する」と説き、そのような体験の一つとして急死した友人が現れた自身の体験を語っている。

その友人が埋葬された翌夜のことである。ユングは眠れないまま横になって友人の急死のことを考え、それに心を奪われていた。すると突如ユングは「彼が部屋の中にいるような感じ」をいただき、「彼が私のベッドのすそのところに立ち、彼について来るよう私に求めているように思えた」。ユングは彼がユングの空想にすぎないのか、幽霊として現実にユングの前に立っているのか自問したが、いずれであるとも証明がつかないのであるから「彼を空想と説明するよりは同じ正当性をもって彼を幽霊として受け入れ、少なくとも試みに彼に現実性を認めることはできるであろう」と考えた。その瞬間、友人はドアのところへ行き、ついて来るようユングに合図した。ユングはもう一度自問し、ようやく友人について行った。その後の展開は以下のとおりである。

彼は私を家の外へ導き、庭に入り、通りへ出て、とうとう彼の家まで行った。(実際、彼の家は私の家から数百メートルのところにある)。私は中へ入り、彼は私を彼の書齋に案内した。彼は踏み台に乗って、上から2段目の棚に立っている赤い表紙の5冊の本のうちの2冊目を指した。その時幻はやんだ。私は彼の書齋を見たことがなかったし、どのような本を彼が持っているのかも知らなかった。加えて私は彼が指し示した本の題名を下方からでは認識することができなかった。なにしろそれらは上から2段目の棚に立っていたのだから。

この体験は私にはたいへん奇妙に思えたので、翌朝私は友人の未亡人を訪ね、故人の書齋を見せてもらえないか尋ねた。果たして、空想の中で見た本棚の下には踏み台があり、遠目でも赤い表紙の5冊が見えた。私は題名が読めるよう踏み台に乗った。それらはエミール・ゾラの小説の翻訳で、2冊目の題名は『死者の遺産』であった。その内容は私の興味を引きそうになかったが、その題名はこの体験との関連においてこの上なく重要であった。

ユングにとって「死者の遺産」とは、亡き友人の出現による「死後の魂の存続」の示唆であったと考えら

れる。

2 考察

1ではユングの生涯にわたる超常体験の数々を見た。ここではそれらの特徴と意味について、1でとり上げた箇所以外の自伝の記述やユングの他の著作、また研究者の説も必要に応じて引きながら全般的に考察する。適宜、根拠となる本稿の章節も示す。

ユングの記述を文字通り受けとるなら、ユングは、現在において、知り得ないはずの未来の出来事や自らが知らない過去の出来事を知り（1.2、1.3、1.5、1.6、1.7、1.9、1.10、1.11、1.12、1.15）、ここにおいて、遠く隔たった場所で起こった出来事を知ったということになる（1.4、1.13、1.14）。またユングは、異形の人影や死者の霊と関わったということになる（1.1、1.8、1.16）。さらにユングは、体という物質の制約を超えたということになる（1.5、1.6、1.15）。それらは物理的にあり得ない不可思議な体験、まさしく超常体験である。そこで問題になるのは、これらの体験がユングの主観的な解釈によるものなのか客観的な事実なのかということであろう。

渡辺学氏はダイニングテーブルとパンナイフの爆裂（1.3参照）およびフロイトの本箱の中での爆音（1.6参照）について、「ここで問題になるのは、端的な物理現象の特異な解釈である。ここでは、物理現象は、精神的な存在の物理的な表現として解釈されているわけである」と述べた上で、「もし、超心理学や心霊現象に対して親和性のある心性というものが存在するとすれば、それはある特定の物理的現象に対して精神的かつ人間的な意味を付与する傾向であるということができよう。[...] それらの体験に対するユングの解釈を見るかぎり、ユングには確かに、このような傾向があったように思われる」と見る¹⁵。たしかに、ユングの超常体験は彼自身によってそういうものとして意味づけられ、いわばそれとして認定されている。そのためすべて彼の主観的な解釈であるという論も成り立つし、すべて彼によるこじつけにほかならないという極論さえ成り立ってしまう。

しかしながら、ユング自身は自らの超常体験を客観的事実と受けとめ、自分は物理的にあり得ないことを実際に体験したととらえていたと考えられるので、そのように見なされるのは不本意であろう。というのもユングにとって何かを客観的事実と認定するための基準はその「現実性 Wirklichkeit」にあったと考えられるからである。たとえばユングはボリンゲンの塔を巡り行く大勢の人影を見た際、その「現実性¹⁶」を顧慮し、それを「心的補償」とか「幻覚」とかととらえることには満足せず「共時的現象」と認めた（1.9）。また、急死した友人がユングに現れた際は、友人をユングの「空想」と説明し去ることよりも「幽霊」として少なくとも試みに友人に「現実性」を認めることを選んだ（1.16）。ユングの晩年の著作『ヨブへの答え』（1952年）には次のような言葉がある。「私に働きかけるもの das, was auf mich wirkt だけを私は現実的 wirklich と認識する。しかし私に働きかけないものは存在しないも同然である」¹⁷。ユングにとって現実性が存在の基準となっていることがうかがえる。超常的なものがユングに働きかけてくる限り、それは彼にとっては現実的なものであり、したがって存在もするのである。

それにしても、どうしてユングは物理的にあり得ないことを実際に体験することができたのか。ユングは自らの超常体験の根拠を「無意識」に求め（1.4、1.7、1.8、1.13）、端的に自分は「無意識における時間と空間の相対化」によって超常体験をしたと考えた（1.4）。ここでいう無意識とは「集合的無意識」を指すと考えられる（1.4、1.7参照）。自伝の中のユングの言葉を新規に引用してユングの考えを確認しておこう。

合理主義者は今日もなお超心理学的経験など存在しないと主張して譲らない。〔…〕少なくとも私たちの心的存在の一部は空間と時間の相対性によって特徴づけられていることに論争の余地はないと私は見る。意識からの距離が増すにつれてこの相対性は絶対的な無空間と無時間にまで至るように思える。(S. 307-308)

「私たちの心的存在の一部」とは集合的無意識のことであろう。

このように、超常体験が集合的無意識のなせるわざであるのだとしたら、意識の制御は及ばないはずである。したがって、ユングの超常体験も意図的に引き起こされたと考えすることはできない。タイミングも様態も、すべては集合的無意識の配剤によると考えなければならないのである。1で示した事例全般におけるユングの超常体験への開かれた態度を見るに、彼はそのことを重々承知していたと思われる。そこには集合的無意識へのユングの絶大な信頼を認めることができる。実際ユングは、集合的無意識はよきにはからってくれると、つまり集合的無意識は適切なタイミングで介入し、確かな情報を提供してくれると信じていたと見られる(1. 13参照)。とはいえユングは、集合的無意識からのメッセージは「イメージ」や「合図」といった形で与えられる(1. 13)ため、そのメッセージを「理解する」よう努めなければならぬと考えていた(1. 7参照)。集合的無意識からのメッセージを理解するには意識の関与を要するであろう。

ところで、たとえばユングが誰かの死を予知してもそれを阻止することができないのだとしたら(1. 15参照)、その予知には何の意味があるのか。また、ユングの超常体験は大部分が親族、患者、知己といったユングと近い人に関して生じている(1. 1、1. 4、1. 10等)が、まったく無関係な人に関して生じることもあり(典型的には1. 5)、後者の場合何か意味はあるのか。さらに、ユングの超常体験の多くは重大な状況において、すなわち、自身の危篤(1. 15)、近い人の死(1. 12等)や危難(1. 13)、有事の際(1. 7)といった危機的な状況や、自身のライフイベントに関わる状況(1. 2)において起こっている¹⁸が、そうでないこともあり(たとえば1. 9)、後者の場合の意味は何なのか。そういった思いや疑問も当然あり得よう。

しかし湯浅氏も「超常現象をみる場合には、それが客観的事実であるかどうかという問題だけでなく、人生を生きていることにかかわる意味や価値の観点からも考えてゆく必要がある」¹⁹と言うように、ユング自身にとっての超常体験の意味をこそ考えなければなるまい。思うに、ユングにとって超常体験は集合的無意識のいわば啓示、恩恵であった。そのことは、超常体験の生起にユングの意図は関与していないと見られること、またユングが幾多の超常体験に際して集合的無意識がよきにはからってくれると信じてそのメッセージを理解することに徹し、理解できた暁にはそれを定めとして受け入れているようであることから推察されるのである。

註

引用文中の〔 〕は引用者による補足を、〔…〕は引用者による省略を表す。

- 1 物理的にあり得ない不可思議な体験を広く指すものとする。
- 2 湯浅泰雄著・訳『ユング超心理学書簡』白亜書房、1999年、14頁。
- 3 同書、159頁。
- 4 当書は書名で呼ばれるよりも自伝と呼ばれる方が一般的ななので、本稿もそれに倣う。自伝からの引用はすべ

- て以下に拠る私訳である。C. G. Jung, *Erinnerungen, Träume, Gedanken von C. G. Jung*, aufgezeichnet und herausgegeben von Aniela Jaffé, Walter-Verlag, Sonderausgabe 10. Aufl. 1997. 同書の引用ないし参照はページ数のみ示す。
- 5 湯浅、前掲書、14頁。
 - 6 研究書、研究論文としては以下のものを挙げるができる。C. G. Jung, *Jung on Synchronicity and the Paranormal*, Key readings selected and introduced by Roderick Main, Routledge, 1997. 蔵琢也「ユングの共時性と因果律—事例の検討と臨床における意味—」『淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究』第16号、2012年。蔵琢也「ユングの臨死体験と関連する事象—類似事例の検討と盲信の危険性—」『淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究』第18号、2014年。一般書まで視野におさめれば、以下のような書籍の中で言及されている。Douglas Dillon, *Carl Jung, Hauntings, and Paranormal Coincidences*, Old St. Augustine Publications, 2015. コンノケンイチ『ユングは知っていた UFO・宇宙人・シンクロニシティの真相』徳間書店、1998年。大上和博『シンクロニシティの謎 誰にもわからない超偶然の裏側』〈青春BEST文庫〉青春出版社、1999年。定方昭夫『偶然の一致はなぜ起こるのか 驚くべき神秘現象の謎を解き証す』〈KAWADE夢新書〉河出書房新社、1999年。老松克博『共時性の深層——ユング心理学が開く霊性への扉』コスモス・ライブラリー、2016年。
 - 7 日本語訳の訳者の一人である河合隼雄氏によれば、翻訳権の関係で英訳を底本としたが訳出に際しては常に原文を参照した、ということである（河合隼雄「訳者あとがき」C・G・ユング『ユング自伝——思い出・夢・思想——』1、A・ヤツフェ編、河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳、みすず書房、1972年、289頁参照）。
 - 8 村本氏は自伝の翻訳について次のような問題を指摘している。「ドイツ語版に書かれてあるが、英語版に書かれていないものがかなりある。[...] さらに英語版には、英語表現上の意識以前の、初歩的な、しかし、解釈上、重大な帰結を生じる意味でも根本的といえる誤訳が少なからず、存在する。[...] なお、日本語版は英語版からの重訳であり、以上、指摘した英語版の問題はそのまま日本語版にいわば、転移している」（ピーター・ホームズ『ユングと脱近代 心理学人間の誕生』村本詔司訳、人文書院、1986年、306–307頁（第二章の訳注3））。村本氏はまた「日本語版」が「ドイツ語版との異同にはまったく言及していない」ことも問題視している（村本詔司「訳者解説」同訳書、324頁）。なお、村本氏は当該の問題を複数の文献で指摘しており、それらの文献を以下で列挙している。村本詔司『ユングとゲーテ 深層心理学の源流』人文書院、1992年、493頁（序文の訳注（3））。
 - 9 当該体験の時期が自伝に明記されていない場合には、体験の内容から時期を確定ないし推定した。それも困難であれば自伝の中での配置を頼りにした。西暦には適宜年齢も並記した。年齢を判断するにあたっては以下も参考にした。Gerhard Wehr, *Carl Gustav Jung: Leben – Werk – Wirkung*, Telesma-Verlag, 3. erweiterte Aufl. 2009.
 - 10 cf. S. 26.
 - 11 ユングの最晩年の書簡が、この事例についての解説というわけではないものの、「元型的状況」と「共時的現象」の関係を理解するのに役立つと思われるので紹介しよう。ユングはA・D・コーネルに宛てた1960年2月9日付の書簡で次のように記している。「共時的現象の大多数は危険、危難、運命的な展開等と関連するような元型的状況で起こり、テレパシー、透視、予知等の形で現れる」。同書簡では「元型的状況」は「情動的状況」とも表現されている。同書簡の全体から見てとれるのは、危機や運命的な出来事に際して情動が喚起され、活性化された集合的無意識の元型（観念と感情のパターン）が布置されて共時的現象が起こるというユングの見解であるが、詳しくは同書簡を参照されたい（C. G. Jung, *C. G. Jung Letters*, selected and edited by Gerhard Adler in collaboration with Aniela Jaffé, vol. 2, Princeton University Press, 1975, pp. 537-543）。
 - 12 原題は*VII Sermones ad Mortuos*で、アレクサンドリアのバシリデス（を名乗るユング）が救いを求めるキリスト教徒の死者たちに行った七つの説教を内容とする。
 - 13 彼は1930年3月1日に亡くなった（C・G・ユング R・ヴィルヘルム『黄金の華の秘密』湯浅泰雄・定方昭夫訳、人文書院、1980年、29頁（注一（訳注））参照）。
 - 14 cf. S. 401.

- 15 渡辺学『ユングにおける心と体験世界』〈南山大学学術叢書〉春秋社、1991年、39頁。
- 16 この原語はRealitätscharakterであるが、当該事例の記述の中ではWirklichkeitも用いられており、文脈、文意から両者は同義的に用いられていると見られる。
- 17 C. G. Jung, *Antwort auf Hiob*, C. G. Jung Gesammelte Werke Bd. 11, Walter-Verlag, 6. Aufl. 1992, § 757.
- 18 前註11参照。
- 19 湯浅泰雄『^{シンクロシテイ}共時性 の宇宙観——時間・生命・自然』人文書院、1995年、188頁。